

廻ぐるり
京きょうと
徒ぶらり
歩あるき
あぺんど





みぞろが いけ 深泥池

携帯端末を備え付けのチャージ端末へ。短い電子音がして、それで会計は済んだ。「まいど」という古めかしい挨拶を残して、車両は二人から遠ざかってゆく。

「あれがタクシーかあ」

「面白かった？」蓮子は電子貨幣残高を確認して、端末を仕舞う。

「すごかったわ。手動で運転する乗用車ってまだ残ってたのねえ」

「東京とかだとまだまだ田舎だから、自家用車もそれなりに生き残ってたりするんだけどね」

二人がいるのは洛北……京都の中心街から北のエリアであり、大学のある吉田エリアよりもさらに北だ。高野川と賀茂川が合流して鴨川になる鴨川デルタからほとんど真っ直ぐに北。少し西には上賀茂神社がおわす。そんなところに、深泥池は

ある。

「……と言つても」さつと風が吹き、メリーの金髪を北の空へ流そうとする。「別にあんな大げさな乗り物を使つてまで来なきやいけない距離でもなかつたわよね」

「面白かつたからいいんじゃない？……なーんて、ちゃんと意味はあるわよ」

池と道路は僅かガードレール一枚分を隔てて隣接している。そこに時折タクシーが通る。乗用車が時代遅れとなつたこの時代においても、旧京都をしのぶ観光資源として、人力車などと共にタクシーは保存された。運転する職人はガイドも兼ねている。

二人は池の周りを歩く。池の表面のほとんどは緑に覆われ、水は流れず、波立たず、池というよりは巨大な水たまりと言つたほうが当を得ている。

「ストップ。それ以上進んだら落ちるわよ」

「え？まだ陸が続いてるじゃない？」

「陸に見えるのは水草でできた浮島なのよ。あと浅く見えるけど底なし沼だから本当に落ちたらア

ウトだからね」

その言葉にやや顔を青くして、メリーは蓮子の腕をつかんだ。

「よく平気でいるわね」

「わかつてれば怖くない。怪異と一緒によ」

水は透き通つて、蓮子の言葉通り底まで見えるが、水底は堆積した泥らしきもので覆われ黒々として、文字通り底の知れない不気味さをたたえている。水面にアメンボや羽虫などの生き物たちが跳ねているが、肝心の水中には魚影のひとつもみえず、どこか生命感が乏しい。それがよりいっそう、この池の時間が停滞した感じを増長させている。あるいは、とメリーは想像する。池が動物の命を呑みこみ、それを糧として草木たちが伸びているのではないかと。

風がまた吹いて、浮島に群生するススキの枯れ穂をざわつかせた。

「ねえメリー、タクシーに関する怪談知ってる？夜にあるタクシーが女の人を乗せるんだけど、行き先だけ告げて全く無言で、怪しいな……と思つていたらいつの間にか消えていた、っていうやつ」

「もちろん知ってるわよ。オカルトサークルの基礎教養レベルの有名な話じゃない……シートが水でぐっしょりと濡れていた、っていうやつでしょ。全国津々浦々で語られてる」

「そう、まさに怪談のスタンダードナンバー……その元祖、発祥の地がここだっていう話なのよ」

「さすが京都……怪談まで伝統が息づいてるのねえ……」

「さっきのタクシーの中でメリーが境界を開いて消えたりなんかしたら、怪談の再現になったのに」
「そういうことは早く言ってよ。ていうかできないわよそんなこと。できてもやらない」

冗談めかしながら、メリーは想像してしまふ。それが本ならば、池に飲みこまれた命というのには、人間も含まれているのではないか。それも、かなりの数。そう考えると、池の底の黒々とした泥がいつそう不気味な光沢を帯びたように見える。

「じゃあ、そろそろ活動を始めましょう」今にも舌なめずりしそうなほどに、蓮子の目は爛々と輝いている。「これだけ謂れのあるところに何もな

いはずがないものね。……ね、メリー。何か見えるんじゃない？」

メリーは苦笑する。本当に生きているのが楽しいそうだな、とまぶしい思いがする。実際、メリーには見えていた。というより思い出していた。ここに似ている場所のことを。

こんなに静かなのに、水面下には確かに生命の蠢動、あるいは脈動する雰囲気が感じられる。有無を言わさぬ生命の迫力。さながら、天然のピオトープ。

そう、この場所は、トリフネ遺跡に似ている。そのことを蓮子に言うべきかどうか、メリーには今しばらくの逡巡が必要だった。



赤山禪院

せきざんぜんいん

「ほら、ね、あれ。屋根の上。猿がいるでしょ」

「うーん……屋根が高すぎて見えにくいんだけど

……確かに、何かいるわね……」

うしろ

京都の中心から北東、つまり良の方角には数多くの寺社が設けられている。言わずと知れた京都の結界造営のためであり、今日まで……つまり、神亀の世界的環境大異変を越えてまで、京都に繁栄をもたらした古くからの知恵のひとつだ。

良、すなわち鬼門。鬼の棲む方角。京のみやこを作った者たちにとつて、この方角を護つて護りすぎることとはなかった。幸さいいのかの神か社のやしろをは

じめ、鎮守・糺の森があり、またこの都を開いた桓武天皇の弟にして最強の怨霊のひとり、崇道天皇こと早良親王を都の北東に祭つたのも、その恨みの力を昇華して、神として京都を守護して頂くという意図があつただろう。極めつけには比叡山

延暦寺が北東から来る禍に向かつて立ちほだかっている。

二人のいる赤山禅院は、そういつた京都を守護する寺社のうちのひとつだ。メリーの住む一乗寺から白川通を北上、修学院離宮のそばにある。

「あの猿が京都を護つてるのよ」

蓮子が帽子を脱いで見上げるのは、拝殿の屋根の上。目を凝らしてよく見れば、その彫像は確かに猿のようだった。

「でも、なんで猿なの？護るならもつと強そうな動物もいっぱいいるじゃない……ライオンとか」

「日本に野生のライオンはいないわよ。ほら、十二支を方角に見立てたら、北東は丑寅うしとらで、南が午で、次が未ひつじ、そして申」

「なるほど、真逆ってことね」

「まあ、坤ひつじまの方角は裏鬼門うらおにまって言つて、これはこれで不吉な方角なんだけど」

「ダメじゃない」

メリーは地上に目を戻す。蓮子のような……モンゴロイド日本人のような色素の濃い瞳を持たないメリーの目には、日本の日差しはやや応えた。サングラ

スを持ってこなかったことを少し後悔する。

「でもあれ、金網に閉じ込められてるように見えただけど、守護神をそんな扱いにして良いの？」

「ああ、あれはそうしてないと動き出してイタズラするっていう謂れがあるんだって」

「……それ本当に京都を護つてるの？」

「少なくともここに猿を置いた人は護らせようと思つたんでしょ。ほら、皇居の猿が辻にもいるじゃない、猿」

旧称京都御所、現皇居の周りに巡らされた塀のうち、北東の角だけは凹んでいて、ここにも丑寅の方角を忌避する意図がある。そしてそこにもやはり猿の彫像が飾られている。

「で、今日は猿を見に来たの？猿なら岡崎の動物園にもいるじゃない」

「あらい挑発。心配しなくてもちゃんど秘封倶楽部の活動をするわよ」

蓮子は帽子をかぶり直す。「今まで活動してきた場所の傾向から考えて、ここはかなり結界が不安定になつてる可能性が高いと思うの」

「その心は？」

「まず境界である事。鬼門の守護っていうことは、人間の世界と鬼の世界を分ける門っていうことよ。それともうひとつ……ここが、チャンボンだから」

「……ラーメン屋なら一乗寺のほうがいっぱいあるわよ？」

「そうじゃなくて。ねえ、あの猿がいるのは拝殿、つまり神社の施設ね。でもここは赤山（禅）院で、禅宗のお寺だと思っじゃない？でも本当はここって比叡山延暦寺の別院で、つまり天台宗のお寺なのよ」

うん、と返事をしながら、しかしメリーは蓮子の言うことを理解できている自信がなくなっている。

「さらにさらに、ここの御祭神は泰山府君って言うて……名前からわかると思うけど日本の神様じゃないの。中国出身の道教の神様なのよ。さらに都七福神のひとつとされる福祿寿殿が……」

「ストツプ蓮子。ストツプ」

とうとう耐えられずに静止をかけ、メリーは眉間にできたしわを伸ばすように揉んだ。

「結局何なのよここは……」

メリーの困惑をよそに、蓮子はフッフと笑った。

「ね？混沌としてるでしょ？こういうところこそ面白いものがあると思わない？」

行くわよメリー、と言って蓮子は境内を奥に向かって歩きはじめ。やれやれ、と苦笑しながらメリーはそれを追おうとして……頭に何かが当たったのを感じる。

「痛っ」

メリーの頭で跳ね、地面に落ちたのはドンクリの実で、しかしメリーの頭上には青空しかない。

不思議に思ったが、どんどん行ってしまう蓮子を追いかけなければいけないかった。

「待ってってば、蓮子」

どこかで猿の鳴く声がする。

写真は百万遍の「ラーメン
にぼ二郎」のラーメンにぼ
三郎野菜増シ。おいしい。

おくづけ

著作・撮影・その他 春日野土筆

平成二十七年十月十二日

科学世紀のカフェテラスにて無料配布

